

令和5年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における

北九州市立 湯川 中学校の結果分析と今後の取組について

スポーツ庁による「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」について、令和5年6～7月に、2年生を対象として、「体力・運動能力」と「運動習慣等」についての調査を実施いたしました。（熱中症等の予防の観点から、20mシャトルランについては、5月中旬から6月上旬に実施しています。）

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

本結果は、学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。また、運動習慣については、学校のみでなく、家庭で運動を一緒に「する・みる・話す」ことが大切です。本校では、運動習慣の確立と授業の充実により、総合的に体力の向上を目指しています。ご家庭でも運動習慣の確立に向けた取組の充実をお願いします。

※ 本調査により測定できるのは、体力・運動能力の特定の一部です。

1. 調査の目的

- (1) 国が全国的な子供の体力の状況を把握・分析することにより、子供の体力の向上にかかる施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会が自らの子供の体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、子供の体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各学校が各児童生徒の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2. 調査内容

(1) 実技に関する調査

〔8種目〕 握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、ハンドボール投げ

※持久走か20mシャトルランのどちらかを選択するため8種目となる

(2) 質問紙調査

運動習慣、生活習慣等に関する質問紙調査

3. 体力・運動能力に関する調査結果の概要

全国・本市・本校の実技調査の結果

<男子>

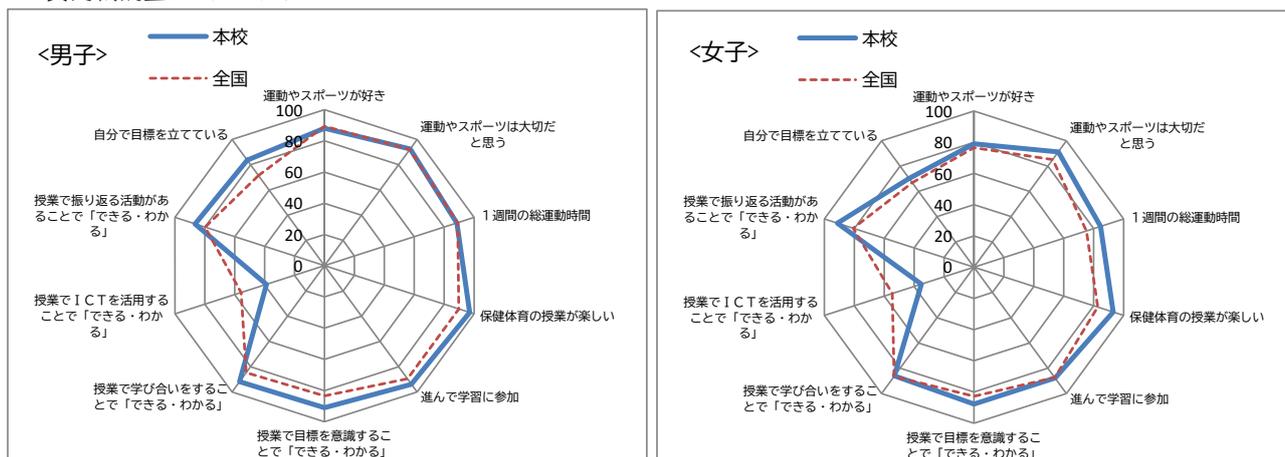
本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	29.02	25.82	44.16	51.22	409.02	78.07	8.01	197.02	20.40	41.32
本市	29.72	26.24	46.29	51.95	413.28	80.12	7.86	201.52	20.51	43.46
本校全国平均以上の種目			○			○				

<女子>

本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	23.15	21.62	46.27	45.65	306.26	50.70	8.95	166.34	12.43	47.22
本市	23.64	22.08	47.52	46.35	320.97	51.41	8.86	170.70	12.13	48.65
本校全国平均以上の種目				○		○				

4. 運動習慣や生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査レーダーチャート



質問紙調査の結果分析

「中学校を卒業した後も、自主的に運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをする時間を持ちたいと思いませんか。」という質問に対して、男子91.9%、女子78.9%が「思う」と答えていることから、授業において運動の楽しさを実感することができており、生活の中に運動を前向きに取り入れることにつながっていると考える。今後もより一層、体を動かすことの楽しさや心地よさを味わわせるとともに、健康や体力の状況に応じて体力を高め、運動やスポーツの習慣化につなげるため、授業づくりの改善を図っていきたい。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科(授業)に関する取組(全校で・学年で・学級で)

ICTの活用状況が全国平均を大きく下回っている点が課題である。現状、学習した動きのポイントと自分の動きを比較し、できている点や修正点を確認することでしか使用できていない。今後は、試合動画を撮影し戦術を改善したり、お手本動画を共有し、自分の動きと比較したり、幅広い活用方法を取り入れた授業を行っていく。

② 運動習慣等に関する取組(1校1取組)

「保健を学習して、もっと運動しようと思いませんか。」という質問に対して、男子89.5%、女子93%が「思う」と答えているので、運動に対して前向きに捉えていることがわかる。今後は、自宅で簡単にできる柔軟体操や補強運動を体育の授業で紹介したり、授業内でも毎時間取り組んだりしたい。また、運動習慣を身につけさせるためには、体の仕組みや運動をする利点を理解させる必要があると考える。さらには、保健の授業も話し合い活動を通して、深い学びにつなげていく。